

同志社大学司書課程・司書教諭課程主催 2013年度東京地区図書館見学会および見学記

(日程)

9月17日(火曜日)

12:30 JR 吉祥寺駅北口に集合
13:00-15:00 成蹊大学図書館見学
15:30-17:30 武蔵野プレイス見学
19:00-21:00 懇親会
「東京ドームホテル」に宿泊

9月18日(水曜日)

7:30 ホテルロビー集合
9:30-12:00 武蔵野美術大学美術館・図書館見学
12:00-14:00 移動・昼食
14:00-16:00 千代田区立千代田図書館見学
16:30-18:30 神田神保町にて自由行動
「東京ドームホテル」に宿泊

9月19日(木曜日)

8:30 ホテルロビー集合
9:30-11:30 国立国会図書館国際子ども図書館見学
見学後解散
(解散後、希望者はアカデミーヒルズ六本木ライブラリー見学)

東京地区図書館見学記

文学部国文学科 野原隆之介

2013年9月17日から19日まで私は東京図書館ツアーに参加させてもらいました。簡単にですがその内容を書いていきたいと思います。

初日はまず成蹊大学図書館を見学しました。言わずと知れたあの有名なガラス張りの球体が浮いている図書館です。プラネットと呼ばれているようで学生が自由に使うことができ、議論・討論ができるようになっていました。入ってみると案外高さで怖いということはなくゆったりとしていました。個人の閲覧室もあり成蹊大学の学生さんをとてもうらやましく思いました。

続いて武蔵野プレイスを見学しました。この武蔵野プレイスは自分にとってはなかなかの衝撃がありました。まず入り口を入るとカフェがあり、図書館という雰囲気がありませんでした。今まで全く武蔵野プレイスを知らなかったため図書館スペース以外にティーンズが集まるフロアや市民団体が集まるフロアなどがあることにとても驚きました。自習室もあり様々な年齢の方が利用していました。ガラス窓からは太陽の光が入るようになっており非常に暖かな雰囲気でした。武蔵野図書館を見学して「場」としての図書館の可能性を見たような気がします。

二日目は武蔵野美術大学図書館を見学しました。誠に申し訳ないことを言うと図書館の内容

うんぬんよりも外観が大変印象に残っています。本棚が外側に並べられているのが特徴的でした。館内の椅子はデザイン的で奇抜でした。「インテリジェントカート」と呼ばれる買い物カートみたいなものもあり立ち読みにも使用することができるものでした。どこをとってもさすが美術大学の図書館だなという感想を持ちました。

続いて千代田図書館を見学しました。千代田図書館は指定管理者制度が導入されておりコンセプトをしっかりと定められて図書館が運営されていました。また千代田図書館は電子書籍の貸出もされており全員が興味津々で説明を聞いていました。電子書籍は書き込みができ、さらにそれらの印刷もできるということで大変便利だという感想を持ちました。神保町に近いということでコンシェルジェという方が神保町の案内をしてくれるというようなサービスもあるそうです。私たちも見学が終了したあと、神保町のパンフレットをいただきみんなホクホク顔でした。

最終日には国際子ども図書館を見学しました。おしゃれな外観であり歴史的建造物にもなっている図書館です。子どもよりも大人がなつかしがって来ると職員さんが言うように内部もおしゃれで絵本がたくさん並べられていました。「子どものへや」は照明がびっしりと天井に並んでおり本を読んでも影ができないように工夫されていました。この工夫は初めて知ったので感心しました。

東京図書館ツアーに参加してみて自分の中で図書館の印象が大きく変わりました。図書館には様々な可能性があり、まさに「成長する有機体」というものを初めて実感しました。現代では指定管理者制度や電子書籍、複合施設、SNSなど様々な変革があります。実際に図書館を見ることによってそれらの変革に敏感に反応している図書館を見ることがで、勉強になりました。また図書館司書になるうがなるまいが一市民として図書館の変革に注目していきたいと思いました。図書館見学以外に神保町などの散策、カニ食べ放題などのイベントも印象深いので振り返ると大変楽しい東京図書館ツアーでした。お世話になった原田先生、佐藤先生、訪れた図書館の職員の方々、そして好奇心旺盛な先輩方には大変感謝しています。ありがとうございました。

文学部英文学科 西川 開

今回の東京地区図書館見学で最も印象に残ったのは武蔵野美術大学図書館である。まずは何と言ってもその外観だ。建物それ自体が本棚で構成されており、全面ガラスで覆われている。奇抜なのは外側だけではない。中に入ると全体がすり鉢状になっており、円形に並んだ書架に見下ろされる。いわばフロアそのものが階段であるため1階と2階の区別がなく、学生はそこかしこに気ままに腰掛け本を読んでいた。蔵書はというと、やはり芸術関連のものが充実している。NDCの700番台を中心に、工業デザインや広告など関連する他分野の本も並ぶ。そうして館内を歩き回っていると、書架の間に置かれているオブジェの様なものが目に入った。手元のガイドブックをめくると、どうやらこの巨大な野球ボールのオブジェはイスであるらしい。武蔵野美術大学図書館には美術館も併設されており、こうしたデザイナーズチェアもそのコレクションの一部であるという。まさしく「美と知の複合施設」である。

次に印象深いのは神田・神保町の散策だ。優に100を超す古書店に囲まれて岩波書店や講談社といった名だたる出版社の本社ビルが立ち並ぶ、古書と出版の町である。この日は朝から図書館を巡り、最後に千代田区立図書館を訪れていた。千代田を出て九段下の駅へ戻ると右手側、首都高速の向こうに広がるのが神保町だ。宿泊場所であるホテルまでは歩いて帰れる距離であり、丁度神保町を突っ切る形となる。そこで、各自が思い思いに「見学」をしながら宿まで戻ることとなった。神保町の古書店は取り扱う本の種類がはっきりと分かれており、専門化している。思想書や洋書、SF、ファンタジーの専門店など個性的な店が軒を連ねる。さらには70

～90年代のサブカルチャー関連の本で店内が埋め尽くされている店もあった。

今この見学記を書くにあたって行程を振り返ってみると、思い浮かんでくるのは個々の図書館に関することよりもむしろ、ホテルの窓から見えた出版社の広告や移動の合間に通った図書館周りの街並みなど、東京の風景、雰囲気についてのことが多い。私が今回の見学行を通して感じたのは、東京は京都よりもずっと「本」との結び付きが強い街である、ということだ。今まで見てきたように、たいへんユニークな図書館や古書店街などを通して、実に様々な形で人が本と触れ合っている。それを肌で感じる事が出来た。このように、東京図書館見学はただ杓子定規に図書館を見て回るだけでなく「本」を軸として東京を知る、多角的なフィールドワークである。